

Kansai Nikikai Opera

Feb.2022



関西二期会 第93回オペラ公演
『オテッロ』(2021年11月)
撮影:早川壽雄

Contents

- 2.3 『ドン・ジョヴァンニ』 作品解説
- 4.5 指揮者・演出家が語る『ドン・ジョヴァンニ』
 - 6 オペラ歌手に聞く
大谷圭介 / 萩原寛明
- 7.8 モーツァルトに質問
 - 9 コンサートレビュー
関西二期会 第93回オペラ公演『オテッロ』
- 10 谷やんの企画・制作デイリーライフ
- 11 オペラ座の凡人 / 賛助会員
- 12 新人会員の紹介 / コンサートスケジュール

Don Giovanni

ドン・ジョヴァンニ

オペラ史上にその名を刻む稀代のダークヒーロー モーツァルト『ドン・ジョヴァンニ』

異色のオペラ・ブッフア

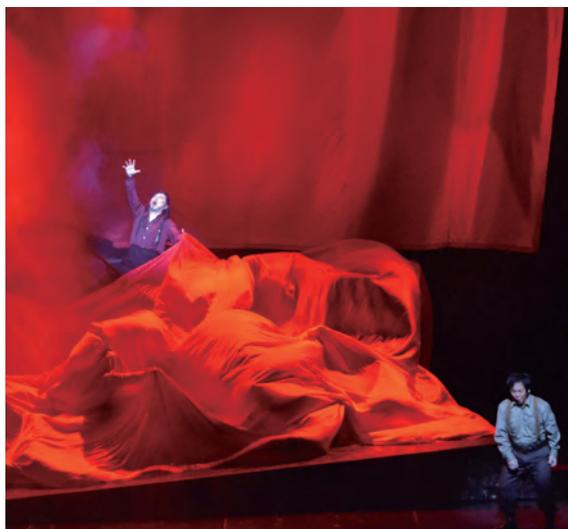
“ドン・ファン”と聞いて、あなたはどんな人物を思い浮かべるでしょう。華麗な女性遍歴を繰り返すプレイボーイ、その人生は美酒と冒険に満ち人々を誘惑せずにはおかない…。関西二期会の第94回オペラ公演はこのドン・ファンの伝説をもとにモーツァルトが書き上げた傑作『ドン・ジョヴァンニ』を上演します。1787年にプラハのエステート劇場で初演されたこのオペラは『フィガロの結婚』『コジ・ファン・トゥッテ』と並んで台本をロレンツォ・ダ・ポンテが手掛けた、いわゆるダ・ポンテ三部作のひとつ。モーツァルトのオペラ・ブッフアを代表する作品ながら、終盤での主人公の地獄落ちなど怪奇性も併せ持った異色作です。ドン・ジョヴァンニを取り巻く3人の女性、ドンナ・アンナ、ドンナ・エルヴィーラ、ツェルリーナをはじめ、従者レポレッコ、ドン・オッターヴィオ、マゼットに至るまでキャラクターの描き分けも鮮やか。レポレッコがドン・ジョヴァンニの女性関係を数上げる『カタログの歌』。ツェルリーナとドン・ジョヴァンニの二重唱『お手をどうぞ』、ドンナ・アンナのアリア『今こそわかりでしょう』など、数々の名旋律に彩られて聴く者を最後まで飽きさせません。

ドン・ジョヴァンニとは何者か

スペインではドン・ファン、フランスではドン・ジュアン、そしてイタリア語でドン・ジョヴァンニと呼ばれるこの人物は果たして何者だったのでしょうか。その伝説は古く16世紀以前にさかのぼると言われます。物語そのものは単純で、とある不品行な若者が墓場で高貴な人物の石像を愚弄し戯れに晩餐に招待したところ、実際に石像がやって来て若者を地獄に引きずり込むというもの。17世紀になるとスペインの劇作家ティルソ・デ・モリー

ナがこのお話に戯曲としての骨子を与え『セビリヤの色事師と石の招客』として発表します。色事師として描かれた主人公ドン・ファン・テノーリオの人物像はヨーロッパ各地に知られることとなり、1665年にはフランスでモリエールが代表作のひとつ『ドン・ジュアン』を発表。以後、舞台作品を中心にキャラクターが定着してゆくののです。1713年には『石像の宴』という喜劇として、初のオペラも生まれています。

時は移って1787年、モーツァルトは前年の『フィガロの結婚』に続く新作オペラをエステート劇場から依頼されます。プラハで熱狂的な歓迎を受けた『フィガロ』のあとだけにここはどうしても連続ヒットが欲しいところ。またその『フィガロ』がウィーンでは受け入れられなかったという事情もあり、起死回生の思いもあったことでしょう。そこで目を付けたのがこの人気のキャラクター、ドン・ジョヴァンニだったのです。



関西二期会 第73回オペラ公演「ドン・ジョヴァンニ」
(2010年、アルカイックホール)



関西二期会 第73回オペラ公演「ドン・ジョヴァンニ」
(2010年、アルカイックホール)

騎士長殺しの運命は？

物語は冒頭から物騒な展開を見せます。意中の女性ドンナ・アンナを我がものにしようと忍び込んだ屋敷で、彼女に抵抗されたドン・ジョヴァンニは、娘を守ろうと現れた騎士長を刺殺。見張りを任せていた従者レポレッコと一緒に逃走します。悲嘆にくれ、男の声を手掛かりに父親の復讐を誓うドンナ・アンナと恋人のドン・オッターヴィオ。まんまと逃げおおせたドン・ジョヴァンニですが、その前に彼が昔、裏切った女性ドンナ・エルヴィーラが現れます。恨みをおつける彼女をレポレッコに押し付け、その場を切り抜けるドン・ジョヴァンニ。

村で結婚式に遭遇したドン・ジョヴァンニは次なる狙いを新婦のツェルリーナに定め、訝しむ新郎マゼットの相手をレポレッコに任せて屋敷のパーティに招待するからとツェルリーナを口説き始めます。彼女があっさり誘惑に乗りそうになった時、またしても現れたドンナ・エルヴィーラがドン・ジョヴァンニの悪らつさを暴露。新郎新婦は辛くも毒牙を免れるのでした。

腹の虫が収まらないドン・ジョヴァンニの前に、来合わせたのが騎士長の仇を探すドンナ・アンナとドン・オッターヴィオ。同じ貴族として助力を乞う2人に、ドンナ・エルヴィーラが警告を発します。その一連のやりとりの中でドンナ・アンナは気づくのです。ドン・ジョヴァンニこそ自分が自分を襲い、父を殺した憎むべき男であると…。

永遠のダークヒーロー

それにしてもこの悪逆非道な男の行状がこれほど多くの人々の心をつかむのはなぜでしょう。おそらくそれはあらゆる社会の約束事から離れ、自由に生きてみたいという私たちの願望をドン・ジョヴァンニが軽々と体現しているからであるように思われます。やがて来る破滅に際して、ドン・ジョヴァンニが騎士長の石像と交わす問答にはぜひご注目いただきたいところ。モーツァルトの天才的な音楽はかつてヨーロッパの伝説にあった不品行な若者を悪と自由に生きるダークヒーローとして甦らせ、永遠の生命を吹き込んだのです。

今回の上演ではドイツの主要オペラハウスで活躍中の指揮者、小林資典が国内オペラ初登場。演出は現代的な感覚に定評のある高岸未朝が務めます。管弦楽は大阪交響楽団。2022年、新たな魅力を纏って登場する関西二期会のオペラ『ドン・ジョヴァンニ』にご期待ください。

(音楽ライター／逢坂聖也)

公演情報

『ドン・ジョヴァンニ』

<全2幕 イタリア語上演・字幕付>

指揮：小林 資典
演出：高岸 未朝
管弦楽：大阪交響楽団

公演日程：2022年3月12日(土) 16:00 開演
2022年3月13日(日) 14:00 開演

公演会場：兵庫県立芸術文化センター
KOBELCO 大ホール

3/12 (土)		3/13 (日)
大谷 圭介	ドン・ジョヴァンニ	萩原 寛明
片桐 直樹	騎士長	萩原 泰介
中西 千尋	ドンナ・アンナ	木澤 佐江子
諏訪部 匡司	ドン・オッターヴィオ	秋本 靖仁
佐竹 しのぶ	ドンナ・エルヴィーラ	森川 華世
萬田 一樹	レポレッコ	山咲 響
菊田 隼平	マゼット	谷本 尚隆
奥田 敏子	ツェルリーナ	岩本 実奈子

お問い合わせ

関西二期会チケットセンター 06-6360-4651

指揮者・演出家が語る『ドン・ジョヴァンニ』

モーツァルトの『ドン・ジョヴァンニ』。彼の作品の中でも異彩を放つドラマ・ジョコーソ(悲劇と喜劇)の世界にどう踏み込むのか、指揮者の小林資典氏と演出家の高岸未朝氏に聞いた。

指揮者 小林 資典

ドイツでの活躍が
長くていらっしゃいます。

2008年からドイツ・ドルトムント市立歌劇場第一指揮者(エアステ・カペルマイスター)、音楽総監督代理(GMD)を務めています。高校時代からアマチュアのオーケストラに所属し、指揮も経験して東京藝術大学を経てから、ベルリン芸術大学で学びました。コネクションがないので色々な劇場に電話し、ベルリンの劇場でチャンスを得て、初めて身近に接した公演がバルンボエム指揮の『ドン・ジョヴァンニ』だったんです。今回の公演は、2018年に日本で初めて指揮をした大阪交響楽団との共演で、『ドン・ジョヴァンニ』を演奏できることが感慨深いです。

モーツァルトの作品の魅力を
どんなところに感じられますか。

数あるレパートリー、作曲家の中でも特別な存在の作曲家です。彼のオペラ作品の登場人物というのは善い人・悪い人と分けることのできない、幾重にも層になった内面を持ち合わせているゆえに解釈は色々できます。この『ドン・ジョヴァンニ』も、一見わかりやすいストーリーの表面をただなぞるのではなく、物語やそれぞれの人物達の裏を考え、複雑な思いを読み解き、生きるものにとっています。

音楽の伝え方で、求められることは
どんなことでしょうか。

ストーリーがわかりやすいからこそ、悪や悲劇的な描き方の匙加減が大事になってきます。オペラ・ブッフの側面ばかりが強調されてもいけないですしね。レチタティーボが肝です。表現や言い方、フェルマータをどうかけるか、台詞や音を遮るニュアンスといった何でもないとを如何に作り込むかで、このような細かいところが伝わっていくと思います。



ドン・ジョヴァンニをはじめ
登場人物がそれぞれ個性的ですね。

モーツァルトの作品は人間の姿が凝縮されていて、感情のやりとりがダイレクトです。人と人との受け応えが根底にあります。演奏していても、観客とのコンタクトを非常に感じます。時代や場面が違っていても、キャラクターを引き立たせることで、現代と変わらないことを観る方に共感してもらえたらいいですね。

延期を経て、
満を持しての公演となります。

我々音楽家と、観客の皆様との相互でその時々での感情の受け渡しが感じられるのがモーツァルトの作品。この公演でもそのような相互の空気でのどのような舞台になるか楽しみにしています。

小林 資典(こばやし・もとのり)
東京藝術大学、ベルリン芸術大学を経て2000年からライン・ドイツ・オペラにてコレペティトゥワ、2008年からはドルトムント市立歌劇場第2指揮者として着任。現在は同劇場の第1指揮者(エアステ・カペルマイスター)・音楽総監督代理(GMD)として活躍している。

演出家 高岸 未朝

演出家の視点から見ると、モーツァルトはどのような作曲家で、『ドン・ジョヴァンニ』はどんな作品でしょうか。

やはりモーツァルトは特別ですね。特筆すべき魅力は、音楽がドラマを演出している点です。演出家のように物語を濃密に演出しながら音楽を作っているところに凄さがあります。音楽を通して、基となった『ドン・ファン伝説』の解釈がされている。オペラ・ブッフアの側面がある一方でオペラ・セリアのようでもあり、デモーニッシュに心に響き、パワフルで心に直接語りかけてきます。

ドン・ジョヴァンニをどのような男性像として捉えていらっしゃいますか？

彼は、いわゆる『女たらし』なのではなく、ピュアな、少年のような心を持った男性なのではと考えています。私自身が女性ですから、女たらしの女性の敵とシンプルに描くこともできますが、敢えて違う視点で考えてみました。つまり純粋に女性の素晴らしさを讃美していたのではないかと思うのです。少年の頃に抱いた永遠の憧れの対象として女性があり、女性というものを知りたいという気持ちがさまざまな女性達との、刹那的だけれども真剣な交際へとなっていたのではないのでしょうか。

彼の人生、その果てに迎える死が意味するものとは一体なんなのでしょうか。

本公演の広報のメインビジュアルとして描かれている『手』。舞台美術の松生紘子さんがデザインした舞台装置でも別の形で用いられています。死の際に地獄へと引きずり込む手、女性へ差し伸べた手、女性の柔らかさへの憧れとしての象徴……。ドン・ジョヴァンニの人生は、彼の方こそが女性達の手へのひら



で転がされていたのではないかなど、モチーフとしての『手』の存在がキーポイントとなります。

感染拡大で劇場を取り巻く状況は以前とは変化しました。

オペラの舞台上では、これまでのような近しく接するような演出は難しく、考慮しなければならないことも増えました。その点を逆手に取り、物理的に近い接触ができない代わりに、演出で濃厚な人間関係を具体化できないかと楽しみながら考えています。オンラインでの交流が増えたこの時勢だからこそ、生の歌声や演技に触れていただき、オペラの迫力を体感していただきたいです。

高岸 未朝(たかぎし みさ)

明治大学文学部演劇学専攻卒業、劇団俳優座研究所文芸演出部修了。2004年にマスカニー作曲「友人フリッツ」の演出で新国立劇場にデビュー。2017年「イル・トロヴァトーレ」にて三菱UFJ信託音楽賞、2019年「ボッペアの戴冠」で三菱UFJ信託音楽奨励賞を受賞。オペラに留まらず演劇やコンサート、脚色・ステージング・振付などへも活躍を広げる。



(インタビュー: 吉村麻希)

オペラ歌手に聞く

人生哲学に一貫して生きる ピュアな男



大谷 圭介.

ドン・ジョヴァンニ役(12日)

—ドン・ジョヴァンニのイメージ像を教えてください。

僕は、結構ピュアな男だと思っています。第2幕で「一人の女性に忠実な男は、他の女性には不義理だ」という台詞があるのですが、彼はその人生哲学に一貫して生きています。もちろん褒められたものではないし僕はそんな生き方ではないですが、ある面では理解はできるかなと。一人の男としては非常に魅力的に映ります。

—多くの女性が虜になってしまう男性を演じるのは、やりがいがありそうですね。

女性にとって魅力的である所作や声の音色に、演技や歌の中でこだわっていきたいです。色気みたいなものでしょうか。実生活では経験できませんので文献を読ん

だり映画を見たりしてイメージを膨らませます(笑)。ただ、モーツァルトの音楽を忠実に歌うことでドン・ジョヴァンニ像を出したいです。

—このオペラの魅力をどんなところに感じられますか。

クライマックスの地獄落ちのシーンでは冒頭から悪魔に引きずられるような音楽が出てきます。古典派からの脱却と言ったら言い過ぎでしょうか、モーツァルトの挑戦を感じます。一方でドンナ・エルヴィーラが登場するシーンなどでは、バロック音楽の形で作曲されています。その二面性が出ているのがすごく楽しいですね。

—舞台に立つには、体力作りは欠かせないですね。

オペラを一本歌いきるには相当な体力・気力が必要です。小さい頃は野球少年で、それも厳しいトレーニングをするチームでしたので、基礎体力はその頃に身に付けたものです。それでも年齢と共にそれを維持していくのは結構難しく、良い舞台創りのためにも体カトレーニングは続けています。最近では自転車をこいでいます(笑)。

モーツァルトのなかの“ドン・ジョヴァンニ”



萩原 寛明

ドン・ジョヴァンニ役(13日)

—ドン・ジョヴァンニのイメージ像を教えてください。

貴族なので品格があり、男の色気みたいなものがある。見ようによってはエゴイストなのですが、そういうことをひっくる

めて許してしまうような魅力を感じます。少し滑稽な部分があると思うので、そこを上手く演じれば憎めない性格に見えるかなと思います。

—ドン・ジョヴァンニを演じるのは3回目と伺いましたが、役柄に愛着をお持ちのようですね。

自分はどちらかといえば奥手で一途というか……。でも、自分の中に全くドン・ジョヴァンニのような部分がないかと言われると、そうでもないのかもしれないですね。それを一生懸命に引っ張り出して演じて、自分の奥底にあ

るものが出てくるのが自分でも意外だったり面白いです。

—このオペラを通して、モーツァルトの秘められた一面を感じることはありますか。

モーツァルトの中にもドン・ジョヴァンニのような一面があったのかもしれないですね。まあ、最後にドン・ジョヴァンニが地獄に落ちて、みんながスカッとするみたいな嫌な奴にはなりたくないです(笑)。観ている人がドン・ジョヴァンニに対して、共感できる部分があればいいなと思います。

—このオペラの魅力をどんなところに感じられますか。

ドラマティックさとコミカルな要素が混在しているところです。特にレポレッコとの絶妙なトークが一番楽しいかなと。相性があると思うのですが、自分の声はモーツァルトを歌っているとき、一番調子がいいんです。小学生の頃にピアノを習い始めてから、モーツァルトの曲がすごく好きで、器楽曲や交響曲なんかもよく聴いていました。

(インタビュー：金子真由)